

五味先生と国文学科

大野

晋

五味先生は、この頃も、時々研究室にお寄りになるから、今までと同じ、いつもお会いしているような気持ちでいるけれども、定年ということでお引きになってから、もうかれこれ一年近くになってしまった。

考えてみれば五味先生と学習院国文学科との縁は、この国文学科が誕生する前からである。亡くなった安倍能成先生が、学習院に文政学部をお作りになり、ゆくゆくは文学部としよう、国文学科も作ろうと考えられたとき、安倍先生は最初の相談相手として五味先生に、いろいろとお話をされたらしい。だから、大学が誕生したとき、五味先生は実質的に非常勤講師であったのに（俸給も当然非常勤講師給だったということだが）安倍先生は教授という肩書きを五味先生におつけになった。

それで、後年、五味先生が本郷から目白に移って来られたとき、五味先生は引続いて、教授という同じ辞令をおもらいになった。これは安倍先生がいかに五味先生に信頼を置いておいでだったかを示す事柄である。

五味先生が学習院の専任になられたのは今から丁度十年前である。その直前、学園紛争のさ中の東京大学の文学部長をお勤めであった結果、少し体をこわしておいでだった。その後回復されたけれども、どうも目白に来られてからの先生のお体は、以前のようではなかったと思う。先生御自身でいちばんそれを齒がゆくお思いだったのではなからうか。

それでも先生は決して講義をおろそかにはされなかった。先生は周到に考え、手堅く推理を行なうことをお教

えになり、独りの思い込みによる結論づけをいましめられて、講義や論文でそれをお示しになった。先生は痛む目を押え押え講義をなさった。卒業論文では、それぞれの学生の数多い誤字を丹念に書き抜いて来られて、いちいちその人に指摘なさったりされた。

先生が七十歳に達せられたとき、昔の話をなさったことがある。戦争中先生が兵隊に召集され、その隊が海外に向うにあたり、中隊長が「五味二等兵は、学校に戻って教育に従事する方がお国に役立つ」という趣旨を言って、先生を除隊にしたという。その隊の船は海に沈んだとのことであった。

先生は旧制第一高等学校の教師として一生勤めるつもりでいたとよく言われる。よく出来る生徒の多い学校、一高のような学校で教えることは、どんなに楽しみの多い、教えがいのあることであつたらう。しかし先生が学習院で誠実に講義をして下さり、その教えを受けることができ、一生幸福であると思つている学生も数多くいることを私は知っている。その人たちの感謝の気持ちを先生はたしかに受け入れて下さっていると私は思う。

先生がお引きになって以来、学習院の国文学科は、何か足りない。その不足は、字にすれば寂とか寥とかいふことか。とは言つても、先生は時折、研究室にお見えになる。そしてさびのある声で——このごろは少し優しくおなりだが——話をなさる。私などはそれをうかがつて心なごむ。

「先生がこれからも御健康で、研讀せられ、そのお講義を多くの人たちに分たれるようにと心からお祈りしております」とここに書けば、学習院の多くの卒業生たちが、言葉を合せていうにちがいない「その通りです」という声が今私の耳に聞こえる。

昭和五十五年一月三十日